YCU
長期留学
プログラム

Monthlyレポート

2026年2月

リーズトリニティ大学（イギリス）

今月は、リーズ大学の人や横浜市立大学の友人など、日本の人ともかかわる機会が多く、いろいろ考えることが多かったです。今に集中しながらも将来のことを考えていかないといけないなと思っています。やりたいことをすべて完璧にやろうとするとどうしても時間が足りないので、優先順位をつけたり、時にはあきらめるたりすることも大切だと学びました。悔いが残らないようにしたいです。常に何かに追われていた２月だったので来月はゆったり楽しめればいいな…と思います。

ケッジビジネススクール（フランス）

２月は授業外での交流も意識的に増やしました。特に、多国籍の友人とのディスカッションを通じて、各国の経済状況やキャリア観について意見交換を行う機会がありました。授業内で扱う理論だけでなく、実際の社会背景や個人の価値観に触れることで、学びがより立体的になっていると感じています。

また、日常生活の中でもフランス語を積極的に使用することを心掛けました。スーパーや公共交通機関など、あえて英語に頼らずフランス語でコミュニケーションを取ることで、語学力の向上だけでなく、自ら環境に適応する姿勢を意識しました。

さらに、将来のキャリアを見据え、自己分析や企業研究の時間も確保しました。異文化環境で学んでいる今だからこそ、自分の強みや価値観を客観的に見つめ直すことができていると感じています。

ゲーテ大学（ドイツ）

２月に入ってからかなり暖かくなり始め、最近では平均１５度くらいとなりました。さらに晴れの日が増え、気持ちの良い散歩日和が続いています。興味深いなと思ったのは、ドイツ人は晴れになると大学生くらいの大人が普通に公園で集まって談笑したりサッカーしたりしていることです。日本では晴れは珍しいことでもないですし、そもそも大学生くらいの年齢で休日を公園で過ごすということはあまりないような気がします。ドイツ人の友達に聞いてみたところ、ドイツ人はみんな日光中毒ということでした。日本に住んでいるとあまり晴れの日の貴重さを感じることはないですが、確かにドイツに来てからは晴れの日が数倍心地よく感じます。

オウル大学（フィンランド）

２月はだんだんと日照時間が長くなり、生活リズムが整えられつつあります。
新しい人たちと会えるように積極的にイベントに参加して外に出るようにしています。ルームメイトは変わらず、私含めて３人で過ごしていて、２人とも非常に優しく、アクティブでフレンドリーなので、一緒に出掛けたり、作ったり、勉強したりと、充実した日々を過ごしています。

Polar bear pitchingという日本でも開催したことのあるイベントのボランティアに参加して仕事をしました。イベント専用のＴシャツとニット帽がもらえ、でかいハンバーガーが無料で食べられるという特典付きでよかったです。とても面白いイベントでした。現地の方と友達になれたことで、その子の家に遊びにいったり、husky sleddingをできたり、今までにない経験だらけで楽しいです。フィンランドの家は敷地がとにかく広くて家の中もでかくて、真っ白で、絶対サウナが付いています。とても居心地がいいと感じました。

YCU
長期留学
プログラム

Monthlyレポート

2026年2月

東海大学（台湾）

台湾は２月が旧正月といって新年を迎えます。日本の新年と似ていて家族や親戚が集まって一緒にご飯を食べたり、遊んだりします。
今回は台湾人の友達が家に呼んでくれて、旧正月期間の６日間を一緒に過ごしました。台湾の大晦日に食べるご飯や正月に食べるご飯、さらに寺に行ってお参り、親戚たちと麻將、ポーカー、爆竹などすべてが物珍しく新鮮な気持ちで過ごすことができました。

この６日間はずっと中国語で会話をしていたので、中国語の上達、物おじせずに話してみる力が付いたような気がします。そして、６日間も中国語で過ごせたという自信にもなりました。おじいちゃんおばあちゃんなど年配の方は中国語とはまた違う台湾語というものを使って話すので、わからないときもありましたが、表情や文脈から予想したり、他の人に簡単な中国語で翻訳してもらったりして、何とかパッションで会話することができました。また台湾のお年玉のような紅包ももらえて台湾文化にどっぷりつかることができて大満足です。

家族・親戚は３０人以上集まる家族のつながりが強い家でしたが、みんな私が日本人だと知ると話しかけてくれたり、簡単な言葉を選んだりゆっくり話したりしてくれてとても優しかったです。

ヤゲウォー大学（ポーランド）

今学期履修した科目では、すべて4.5／5の評価を得ることができた。ほぼ全ての授業に出席し、予習・復習に時間を費やしたことで、内容理解に努めることができたと感じている。一方で、「ARTS AND CULTURE IN CONTEMPORARY URBAN DEVELOPMENT」と「PREDICAMENT OF MEMORY THROUGH DOCUMENTARY FILM AND ETHNOGRAPHY, POLISH CASE」の講義では、より積極的に発言できたのではないかという反省が残っている。全く発言しなかったわけではないものの、ヨーロッパの学生と比べると発言回数は少なく、授業スタイルへの適応に難しさを感じた。日本のように指名されてから発言する形式ではなく、自由に議論へ参加するスタイルに戸惑いがあったことも一因である。また、ディスカッションを通して英語の語彙力やリスニング力に課題を感じる場面も多くあった。しかし、その差を実感できたことは、自身の英語学習への動機づけにもつながっている。実際に、環境への適応に苦しみ授業を途中で断念した日本人学生も身近にいたが、自分自身は課題を前向きに捉えられたことを成長の一つと感じている。来学期は今学期の反省を踏まえ、より専門性を深めるとともに、発言機会を増やし、英語運用能力の向上にも一層努めていきたい。